

「未来を創造し、社会に貢献する人材の育成」

令和元年度 柳津町立会津柳津学園中学校

学校だより

令和2年1月10日(金)発行 第 36 号 発行責任者:高橋 弘悦

男衆勇壮「七日堂裸まいり」



七日堂裸詣りとは、1000年以上も昔の伝説が起源になっている伝統行事です。

昔々の伝説一。かつて、この地は不作や疫病に長く悩まされていたが、虚空蔵尊のお告げを受けた弥生姫が、只見川の底に棲む龍神から如意宝珠を借り受けることで、その不幸を調伏することができた。しかし、数年後の1月7日の夜に、龍神はその宝珠を取り返すべく、菊光堂に現れる。そこで、信者たちは宝珠を渡すまいと、堂内で結束。必死に騒ぎ立て、龍神を追い返すことに成功する。この「七日堂裸詣り」は、その時の団結の尊さを今に伝えている。(引用:会津物語)

この伝説の名残で、今でも毎年1月7日の夜、20時30分から男たちが裸一貫で「わっしょい、わっしょい」と大声でかけ声をかけながら、福満虚空蔵菩薩圓蔵寺を目指して駆け上ります。その後、本堂内にある長さ4.8メートルもある大鰐口と呼ばれる巨大な綱をよじ登ることで、1年間の無病息災、祈願成就、福を招くといわれています。



今年も本校から8名の生徒が鰐口登りに挑戦してくれました。

「龍も畏れる人となる」と校歌にも歌われる伝統の行事に参加してくれた生徒諸君の心意気に敬意を表します。

なお、まかない手伝いに、2年生女子生徒が協力し、地域の祭りを盛り上げてくれました。



石段を駆け上がり本堂を目指す参加者



冷水で身を清める参加者。凍えるような寒さの中、男たちが気勢を上げた

柳津町の福満虚空蔵菩薩円蔵寺で7日夜に繰り広げられた伝統の奇祭七日堂裸まいりでは、凍えるような寒さの中、下着姿の男たちが気勢を上げ、上へ上へと綱をよじ登つた。

カメラ
トピックス

七日堂裸まいり



大鰐口（おおわにくぐち）を目指す男たち。子どもが綱を登りきると、ひときわ大きな歓声が上がった

極寒の中 男衆が気勢



裸まいりを終えた男たちは抽選会に参加し、今年1年の運気を占った



▲ 柳津町商工会女性部は、こづゆや甘酒で訪れた人の体を温めた
◆ 奇祭には会津柳津学園中の男子生徒や教員も参加、伝統行事を盛り上げた

「やりきる」体験を大切に

今年も、地元の伝統行事の継承に重要な役割を果たしてくれた本校生徒たちですが、鰐口登りは、端で見ているよりも難しいものであることが分かります。日頃から身体を鍛えている中学生や高校生でさえ、10センチの距離を越えられずに滑り落ちてしまう光景を何度も目にしました。それでも、何度かの挑戦で登り切った生徒の表情は、とても晴れやかで「やり遂げた！」という満足感に溢れています。この瞬間を味わいたいからこそ、千年もの間、意味のある行事として受け継がれてきたのでしょう。

かつての教え子から、「捨てられない世界史の教科書」の写真を見せられました。高校でよく使われる「山川出版社」の世界史教科書です。表紙の、開くとき親指が当たる部分がすり切れています。

「何回開くとこういう状態になるんだろう」

としばし考え込んでしまいました。「継続」の重みと、ここまで「継続」できる人がいることに「心から感動」でした。このようなやりきる経験をした人は、どんなことでもやりきる自信が持てるんだろうなあと思います。

これから初めての受験に挑戦する生徒、新たな目標を立て、達成に向けて努力をはじめた生徒も、「鰐口登り」の精神で、やりきる体験ができる一年にして欲しいと思います。

